

長篇記録映画
2005年作品
16mmカラー 2時間42分

か い が わ

粥川風土記

-岐阜県郡上市美並町高砂-

製作
民族文化映像研究所



虚空蔵菩薩像(平安末期)



円空 庚申(尼僧)像



筏流し



長編記録映画

かいがわ 粥川風土記

-岐阜県郡上市美並町高砂-

企画製作
民族文化映像研究所

自主映画/作品No.119
16mmカラー/2時間42分

協力
高砂地区(粥川・高原)のみなさん

支援
文化庁

■制作/姫田忠義 小泉修吉 ■演出・ナレーション/姫田忠義
■撮影/澤幡正範 伊藤碩男 小原信之 水野雅夫 ■編集・音声/姫田蘭
■演出助手/今井友樹 ■調査・作図/大江栄三 ■製作デスク/浅井桂 大江純恵
■録音/東京テレビセンター ■現像/ヨコシネ ディーアイエー

映画の「案内

空、そして山。

水は、この空々たる世界から生まれる。

水は、万物をうるおす。

人も、その恩恵のなかにある。

日本は国土の70%以上が山地におおわれた山国である。

また、水に恵まれ、草木の成育条件に恵まれた水の国、森林の国である。

が、近年、その山や水、森林の荒廃が激しい。

いったい日本の自然は、そして人間の生活、文化はどこへ向かおうとしているのか。

日本屈指の清流、長良川の源流域南端部にある支流、粥川。

長篇記録映画「粥川風土記」は、その粥川流域の人びとが、いかに山や水に接し、そこに育まれた草木、虫、鳥、魚、動物などの生物たちと接し、そしていかに人と人のつながりの歴史を培ってきたかを、足かけ四年、初動から数えれば7年の歳月にわたってたずね、記録したものである。

長良川の水がきれいなのは、支流の水がきれいだからである。

粥川と長良川の合流点に立てば、それが誰の目にもわかる。一目瞭然である。

では、なぜ、粥川の水は、長良川の本流のそれよりきれいなのか。

「粥川風土記」は、おのずからその理由に踏み込んでいく。

自然の水、自然の流れがきれいなのは、その自然そのものの力であり姿である。と同時に、それに寄りそって生きる人の生活のありようとの反映である。

この地の人々の心を知りたい。この長篇記録映画には、おびただしい人びとの姿と声があらわれる。

映像による 風土記編纂の時代へ

本来、「風土記」とは、単なる表面的知識の羅列、集積物ではない。激変する歴史的激動期に、人間の生活生存にとつてぎりぎり何が必要なのか、それを必死に探し、考え、記したものである。

古代の出雲風土記に、例えば、菌類を含めて99種の草木類の名があり、それらはすべて薬草と考えられる。古代の人の生存にとつて、薬草がどれほど大事なものであったか。

以下、近世には「新編風土記」が、さらに第二次大戦後には出版界に「風土記日本」があらわれている。

「粥川風土記」は、激変混迷する21世紀初頭のいま、私たちがなによりに求めた映像による風土記編纂事業の嚆矢と言える。

そしてこれはまた、粥川流域の人びとが、山について、水について、森林について、虫や鳥や魚や動物について、そして人間のあり方について、交々語る「庶民風土記」、「語り部風土記」でもある。

「越後奥三面山に生かされた日々」(一九八四年・二時間二五分)、
「越後奥三面 第二部、ふるさととは消えたか」(一九九五年・二時間三四分)など、その先達の作品群はすでにある。

民族文化映像研究所 について

民映研は、一九六一年の設立以来日本の基層文化を映像で記録・研究することを目指して出発した民間の研究所です。

北緯20度から北緯45度に到る約3千キロメートルにも及ぶ長大な「日本列島」。そこには何十万年という長い「歴史時間」の中で培われた「自然との深い対応と共生」の人間生活・文化があります。その「自然との深い対応と共生」のありようを見つめ、それを映像によつて明らかにしようとしてきました。そしてその作業は、日本にとどまらず、フランスなど世界諸民族の地へも拡がりつつあります。

これまでの40年以上の活動から、百十九本の映画作品と、百五十本余りのビデオ作品を生み出してきました。